

文部科学省委託「外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業」  
モデルプログラム（2017年度版）を活用した授業・研修  
大学における養成 No.2

日本語教育方法論

検証実施機関（団体）：宇都宮大学  
宇都宮大学 国際学部 鎌田 美千子

1 検証対象の研修・授業について（該当するものにチェックを入れてください。）

養成／研修	<input checked="" type="checkbox"/> 養成 <input type="checkbox"/> 研修
タイプ	<input type="checkbox"/> 基礎教育 <input checked="" type="checkbox"/> 専門教育 <input type="checkbox"/> 支援員教育
研修・授業日（期間）	2018年 11月 1日
総時間数	1.5時間*（1.5時間×1回） *受講者用アンケートの回答時間を含む
研修・授業科目名	日本語教育方法論
受講者	人数 31人 学年（学部）：2～4年 専攻：国際学部国際学科 外国人児童生徒等教育／日本語教育に関する経験の有無：有7名（ボランティア），無24名

2 地域の日本語教育関係者や学校教育との関わり（大学として、あるいは教員個人で）

(1) 周辺の地域の日本語教育関係者／ボランティア等との連携など

- ・地域の日本語教室のボランティア養成（初心者コース及び経験者コース）を1999年より行っている。
- ・例年、卒業研究のインタビューやアンケート、授業での教材作成等の際にご協力いただいている。
- ・教育学部と教育委員会主催のサマーセミナーの講師や、学校教員を対象とした夏季一斉講習の講師を務めた。

(2) 周辺の学校との交流や共同研究、或いは教育行政との関係など

- ・日本語教授法に関する講義や演習を内地留学中の学校教員が毎年1～2名聴講している。内地留学を終えてからも、外国人児童生徒教育に関する相談に対応している。
- ・学生たちが県内の学校で学習支援のボランティアを行っている。
- ・留学生たちが周辺の学校の国際理解教育に協力している。

(3) 日本語指導や外国人児童生徒教育等に関わる研修など

- ・日本語教育に関する専門科目を複数開講し、毎年1～2回程度、年少者日本語教育に関して取り上げている。年度によって、日本語指導の経験があるゲストスピーカーを招くことがある。
- ・全学部の学生が受講できる基盤教育科目として「年少者日本語教育」という授業を2018年度より開講している。
- ・国際学部と教育学部の教員でオムニバス形式の「グローバル化と外国人児童生徒教育」という授業を開講している。

### 3 研修・授業の成果について

#### (1) (受講者アンケートより)

##### ①受講者の研修への期待 (アンケートのⅠより)

- ・授業前のアンケートでは、期待する内容として、実際の教え方、留意点や心構え、授業展開、教材等が挙げられた。

##### ②受講者の研修内容の理解度・満足度 (アンケートのⅢ①より)

- ・受講者は積極的に取り組み、総じて理解した様子であった。受講者の満足度は高く、授業後のアンケートⅢ①では、期待度との一致が「ほぼ一致」(31.0%)、「だいたい一致」(65.5%)という結果となり、肯定的な回答が9割を超えた。

##### ③関心を高め、教育力の向上を促したと考えられる内容・活動 (受講者アンケートⅢ②の回答より)

- ・特に関心を高めた内容・活動は、「日本語教科書の選定」「日本語教育におけるシラバス」「日本語教室での学習内容」であった。授業中のペアワーク、グループワークも活発になされ、その後の報告や振り返りからも関心が高まったことがうかがえた。

##### ④受講者が今後に望む研修・授業の内容と活動 (受講者アンケートⅢ3より)

- ・実際の教え方、サバイバル日本語、文法、日本語レベルの測定、実際に外国人児童生徒と触れ合ったり教えたりすること、実際の状況や問題点・困難点などをどのように乗り越えるかなどが挙げられた。今回学んだ内容をもとにさらに理解を深めたい様子がうかがえた。

#### (2) 研修企画の立場から見た、研修の成果と課題 (企画者アンケートⅢの回答より)

- ・年少者向けの日本語教科書を複数検討した本授業では、年少者日本語教育への関心と理解を深めるといった成果があった。次の段階としては、授業の進め方と問いの立て方、教科書以外の教材などについても取り上げ、教育力の向上につなげていきたい。

### 4. モデルプログラムについて

#### (1) 養成・研修内容構成 (報告書 pp. 72-76) について (意見)

- ・概ね適当であるが、日本語指導や教科指導については、さらに細分化して詳しく扱ったほうがよいと思われる。
- ・⑳教科の内容<支援員>の「授業のことば、教科のことば」は、支援員にとどまらず、<基礎>、<専門>にも必要だと考える。
- ・㉑の日本語指導に「教材・教具の利用と作成」がある一方で、㉒及び㉓の教科指導には「教材・教具の利用と作成」がない。㉒及び㉓の教科指導にも「教材・教具の利用と作成」を取り入れたほうがよい。例えば教科内容の理解のための教材の創意工夫や、リライト教材などに関しても取り上げれば、実践力の向上につながると思われる。

(2) モデルプログラム（報告書 pp. 207-244）について（意見）

- ・「講義」「活動」「フィールド」のバリエーションがあつて、細案を考える際にも大変参考になった。

(3) モデルプログラムの活用で研修の運営が円滑になったか。

- ・大学の授業では、文部科学省から出されている「外国人児童生徒受入れの手引き」についてこれまで簡単に触れる程度であったが、このモデルプログラムを活用することによって、具体的な内容として授業に取り入れやすくなってよかった。

(4) モデルプログラムの活用を通して、研修・養成で、どのような力を高めてほしいか。あるいは、高めるためには、どのような活用の仕方が必要だと思うか。

- ・授業以外でも受講者一人ひとりが主体的に取り組み、子ども一人ひとりに寄り添った教育ができるようになってほしい。